

【文章】

① 辛亥年七月中記 **乎獲居臣** 上祖名 **意富比埜** 其兒 **多加利足尼** 其兒名 **弓已加利獲居** 其兒名 **加披次獲居** 其兒名 **多沙鬼獲居** 其兒名 **平弓比** 其兒名 **加差披余** 其兒名 **乎獲居臣** 世々為杖刀人首奉事来至今 **獲加多支鹵大王** 寺在 **斯鬼宮** 時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也  
 \* 辛亥年七月中記す。乎獲居臣、上祖の名は意富比埜、其の兒多加利足尼、其の兒名は弓已加利獲居、其の兒名は多加披次獲居、其の兒名は多沙鬼獲居、其の兒名は半弓比、其の兒名は加差披余、其の兒名は乎獲居臣。世々杖刀人の首と為て、事へ奉り来たりて今に至る。獲加多支鹵大王の寺斯鬼宮に在りし時、吾天下を治むることを左く。此の百練の利刀を作らしめて、吾が事へ奉る根原を記すなり。  
 (埼玉県行田市稻荷山古墳出土鉄劍銘。五世紀末〜六世紀初)

② 東南陸行五百里、到 **伊都国**。官曰 **爾支**、副曰 **泄謨觚**・**柄渠觚**。有千餘戸。世有王、皆統属女王国。

\* 東南陸行五百里にして、伊都国に到る。官を爾支と曰ひ、副を泄謨觚・柄渠觚と曰ふ。千餘戸有り。世々王有りて、皆女王国に統属せり。  
 (魏志倭人伝)

③ 辛巳歳集月三日記 / **佐野三家** 定賜 **健守命** 孫 **黒壳刀自** 此 / **新川臣** 兒 **斯多々弥足尼** 孫 **天兒臣** 娶生兒 / **長利僧** 母為記定文也 **坂光寺** 僧

④ 橛直 伝之我持往稻者馬不得故我者反来之故是汝下部  
 ・ 自舟人率而可行也 其稻在処者 **衣知評** **平留五十戸** **巨波博士** 家

\* 橛直伝ふ。我が持ち往たりし稲は、馬得ぬ故に、我は反り来し。故、是の汝下部、自ら舟の人率て行くべし。其の稲の在処は、衣知評の平留の五十戸の且波博士の家ぞ。  
 (滋賀県西河原森ノ内遺跡出土木簡。天武朝中期)

⑤ 春楊 葛 山 発雲 立 座 妹 念 (万葉集 一・二四五三)

・ 雪已曾波 春日消良米 心 佐閑 消失多列夜 言母不往来 (万葉集 九・一七八二)  
 (柿本人麻呂歌集略体歌・古体歌)

⑥ 「奈尔波ツ尔作久矢己乃波奈」(「難波津に咲くやこの花」)

・ 「皮留久佐乃皮斯米之刀斯」(「春草の始めのとし」)  
 (徳島市観音寺遺跡出土木簡。六八〇年頃) 平成一〇年出土  
 (大阪市難波宮跡出土木簡。六四〇〜六五〇年頃) 平成一八年出土

⑦ 観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子 …… 即説咒曰  
 羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶 般若心経 (般若心経)

【佐野】

- ① 上毛野 佐野の莖立ち折りはやし吾は待たむる今年来ずとも（万葉集一四・三四〇六）
- ② 上毛野 佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも（万葉集一四・三四一八）
- ③ 上毛野 佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（万葉集一四・三四二〇）
- ④ 佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか子ろが面に見えつる（万葉集一四・三四七三）？

【下賛】

\*大宝年間（七〇一〜七〇三）に国名の漢字二文字化が行われた。それに遅れて、郡郷名の漢字二文字化も行われた。いずれも徹底的なものであった。

- ① 近淡海↓近江、遠淡海↓遠江、上毛野↓上野、下毛野↓下野、无耶志↓武蔵、多遲摩・多遲麻↓但馬、波伯吉↓伯耆  
倭↓大倭、嶋↓志麻・志摩、木↓紀伊、粟↓阿波など

② 右の件の郷の字は、靈龜元年（七一五）の式に依りて、里を改めて郷と為せり。其の郷の名の字は、神龜三年（七二六）の民部省の口宣を被りて、改めぬ。

（『出雲国風土記』総記）

- ・拜志の郷。本の字は林なり。（意宇郡）
- 漆治の郷。本の字は志丑治なり。美談の郷。本の字は三太三なり。（以上出雲郡）
- 三屋の郷。本の字は三刀矢なり。飯石の郷。本の字は伊鼻志なり。
- 多祢の郷。本の字は種なり。（以上飯石郡）

【石上尊・藤原尊】

① 天地の中に一物生れり。状葦牙の如し。便ち神と化爲る。国常立尊と号す。至りて貴きをば尊と曰ふ。自餘をば命と曰ふ。並に美拳等と訓ふ。下皆此に效へ。

（『日本書紀』神代一の〇）

② 謹白

進上鳥等

右件物、以月廿一日可用者、乞照此趣、不論昼夜、佐官高屋宅、仍具状、

謹白、

一進上鴨二翼直一百卅文

右御料買求、進上如件、

（天平宝字）七年二月廿日上馬養状

謹上 吉成尊侍者

（上馬養状〈編年文書五・P.387〉）

【多胡】

- ① 吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも（万葉集一四・三四〇三）
- ② 多胡の嶺に寄綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに（万葉集一四・三四一一）